

玉鬘の歌

鈴木日出男

亡き夕顔の侍女であつた右近が、今では源氏の女房の一人として仕え、源氏の夕顔追慕の話し相手にもなっている。その右近が自らの長谷詣での折に偶然にも、長谷の観音の験力にすがりつくかのやうに参詣していた玉鬘一行と出遭つた。玉鬘は夕顔と旧頭中将（現在の内大臣）との遺児である。右近には玉鬘の幼時の思い出しかなかつたが、今は二十歳の女盛りに成長した彼女と再会したことになる。感動した右近がそれを源氏に告げると、彼の夕顔追慕がいよいよ刺激されるにとどまらず、右近一人だけを呼び出しては玉鬘の処遇について次のように言う。

さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん。……父大臣には何か知られん。いとあまたもて騒がるめるが、数ならで、今はじめ立ちまじりたらんが、なかなかなることこそあらめ。

我はかうさうさうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はんかし。すき者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ。

（玉鬘・一二二頁）

これによれば源氏は、この玉鬘をわが娘分として自邸六条院に引き取り、実父内大臣には知らせずにおこう、というのである。その理由として、内大臣には多くの子どもがあり、その世話で騒がしくしている環境では、今さら田舎暮らしの玉鬘が出現したというのではかえつて不都合であろう、それに対して自分は、子が少なく心寂しく過ごしているのだから、思いもかけない所から捜し出した娘とも言つておこう、と理屈づけている。これは身勝手な理屈としかいようもないが、さらに末尾「すき者どもの……」には特異なまでの思惑がとりこまれる。玉鬘を六条院の花型の姫君のように仕立てて、六条院に出入りする多感の人々を惑乱させようとするのは、人々の心々を自分に惹きつけて掌握しようとする、源氏ならではの人心管理の情理だといつてよいだろう。この思惑は後にも紫の上を相手に繰り返し返して発せられているが（一二三頁）、六条院の玉鬘物語を特徴づける重大な要素とみられる。

源氏はそうした思惑から、玉鬘を引き取るべく、彼女への消息を贈ることになった。その贈歌は次のように、やや難渋な技法を介して、もつてまわつたような言い方になっている。受けとめる側から

いえば、どのように応じてどう返歌を詠むべきか、きわめて厄介な贈歌である。それというのも、ここには、田舎暮らしの彼女が源氏の思惑にふさわしい女君であるかどうか、それを試みようとする意図があるからである。彼の脳裏には、それとも知らず交流してきた末摘花の無教養さへの苦々しい体験もかすめている。

知らずとも尋ねて知らむ三島江に生ふる三稜の筋は絶えじを

(一二三頁)

上の句「知らずとも尋ねて知らむ」は、あなたは今までは知らずに入たとしても、やがて知るはずだ、の意。その知らねばならぬ事実がほかされていて、じつにもってまわった言い方になっている。その知るべき事実がじつは、下の句の序詞「三島江に生ふる三稜の」に導かれる「筋」の語に暗示されるように、一首は仕組まれている。「三稜」は沼などに自生する多年草の水草。この歌では、その葉に筋が多いところから「筋」の語に接続しているが、それが葉の筋の意にとどまることなく、掛詞として血筋・縁故関係の意をも表示することになる。それによって、源氏自身と相手の玉鬘との間に「筋は絶えじ」としているのは、玉鬘の実父内大臣と源氏とは義兄弟の仲として、切れることのない縁因に結ばれていることを暗に主張しているのである。

また、序詞の「三島」は次のように、『万葉集』以来歌に詠み込まれてきた地名である。

三島江の玉江の薦を標めしより己がとそ思ふいまだ刈らねど

(巻7・一三四八)

三島江の入江の薦を刈りにこそ我をば君は思ひたりけれ

(巻11・二七六六)

類歌関係にあるともみられるこの二首は、「三島江―薦―(標す・刈る)」の類型による寄物陳思型の恋歌である。源氏の歌も、この万葉以来の序詞表現を踏襲している。地名の「三島」は「薦」を連想させる語になっているが、後世には「葦」を連想させる歌枕になっていく。源氏の歌では、「薦」でもなければ「葦」でもなく、独自に「三稜」と結びつけられている。「三稜」としたのは前記したように、葉の筋の多さから「筋」を掛詞として用い、玉鬘との因縁の深さを暗示させる意図からである。この表現の複雑な仕組みが、はたして玉鬘から理解してもらえられるかどうか。

源氏に試される玉鬘が、どのように応じたか、その返歌である。

数ならぬみくりや何の筋なればうきにしもかく根をとどめけむ

(一二四頁)

源氏の贈歌に即して、共通の語として「三稜」「筋」を用いた。一語以上の語を共用するのが返歌の常套の手法である。そして一首を、水草の様に心情のありようを重ねて構成するのも、贈歌の寄物型の表現に即応している。そのために、「三稜」に「身」を掛けて、さらに「泥」に「憂き」を掛け、物象と心情を対応させる表現を構成する。このように贈歌に即すことによって、「何の筋なれば」の疑問を起点に、かえって贈歌への反発的な発想に立つことができる。一首は、人数でもないわが身は、どんな筋合い(縁)で、三稜が沼に根をおろすように、この憂き世に生まれついたのだろうか、の意。

源氏が、あなたとは切っても切れない縁にあるとして、相手との関係を言うのに対して、この玉鬘は、それと知りながらもはぐらかし、相手ならぬ自分自身を表して、もっぱら憂き世に生かされているわが身のつらさを内省的にとらえている。もとより、男からの働きかけに対して、それをそのまま切り返すか、あるいは自分自身に執するか、それが女歌に特有の発想である。彼女のこの内省的な返歌が、二人の贈答歌としての呼吸を完璧なものにしているであろう。

これを受け取った源氏は確かな手応えをおぼえたのであろう、物語に「あてはかに口惜しからねば、御心おちにけり」とあり、六条院の女君として相応しく安堵できたという。さらにその魅力ある手応えが揺曳しているのであろう。彼は次のような独詠歌を詠んだ。

恋ひわたる身はそれなれど玉鬘いかなる筋を尋ね来つらむ

(一三二頁)

一首は、故人(夕顔)を追慕するわが身は昔のままだが、あの娘はどんな筋をたどってやってきたのだろうか、の意。前掲の贈答歌の重要語「筋」がここにもひびいていて、それを表現の要として詠んでいる。その「筋」から縁語として連想される「玉鬘」が、この魅力ある女君の美称として名づけられた。源氏の心に即していえば、故人は故人として、新たに心惹かれる女君が目の前に現れ出た、ぐらいの思いなのであろう。

しかしそれにしても、玉鬘の返歌で、わが身を「憂き世」に生かされた存在だとする自己内省は、どこからきているのか。贈答歌として相手の言い分をはぐらかす意図はわかるものの、その内容はや

や唐突のようにもみられる。それについては、後にふれることになる。

二

玉鬘の詠歌のすぐれた技は、物語のなかではすでに、長谷寺で右近と彼女が邂逅する、その感動を詠みあう贈答歌のありようにも証されていた。同性同士の贈答歌では下位の者から詠みかけるのが常、その作法に従って右近から詠みかけ、玉鬘がそれに対してどのように返歌するのか。

左近「二本の杉の立ちどをたづねずは古川の辺に君を見ましや
うれしき瀬にも」と聞こゆ。

流れぬ

(一一六頁)

右近の贈答歌では、場所を示す「二本の杉の立ちど」「古川の辺」の位置関係が漠然としている。しかし次の古歌を想起すれば、二つはともに長谷の地であることが知られる。

初瀬川古川の辺に二本ある杉 年を経てまたも逢ひ見む二本ある杉 (古今 雑躰・旋頭歌)

長谷の観音信仰を背後に詠まれた歌謡ふうの歌あり、その「杉」は長谷の象徴、「初瀬川」「古川」は同じ川である。右近の歌であえて長谷や初瀬の地名を用いないのは、かえって相手にそれを強く想起させるべく、長谷観音の靈力を強調しようとするためであろう。さらに「…ずは…まし」の反実仮想の語法によって、この地を訪れた

からこそ出逢うことができたという事実を、裏側から強調したことになる。一首は、二本の杉が立つこの初瀬に参詣しなかつたなら、この古川のほとりであなたに会えただろうか、会うはずもない、の意。また、この贈歌に添える語句「うれしき瀬にも」は、

祈りつつ頼みぞ渡る初瀬川うれしき瀬にも流れあふやと

(古今六帖・第三「川」)

の引用による。「瀬」は、川の瀬の意と機会の意との掛詞。初瀬川のはとりで邂逅しえた偶然の機会を「うれし」と思う。

これに対して玉鬘はどう応ずるか。返歌に「初瀬川」とあるのも贈歌に引かれた旋頭歌の意図がわかつたからであり、下の句に「逢ふ瀬に身さへ流れぬ」とあるのも、右近の添え言に「祈りつつ」の古歌の引用が諒解されたからである。そして、そのように諒解した上で、言葉なり発想を共有しあい、それによって、かえって玉鬘自身心がきわだたせられてくる。「初瀬川」を軸に「瀬」「流る」の縁語をめぐらし、初瀬川の急流の景に託して、自らの心情のありようを明らかにしようとする。「身さへ流れぬ」とは、初瀬川の急流のように、あふれ出るうれし涙に身体までも流されるほどだということである。もともと「涙川」に袖を濡らしたり身が流されたりというのは恋歌の常套的な表現であるが、ここでは長谷観音の靈験への感動をいう点が独自の表現であろう。その独自の表現が、贈歌への対立的な、ないしは対等な位置を得て、二人の共感をもたらしている。そのことを、右近の感想をいう叙述（玉鬘の）容貌はいとかくめでたくきよげながら、田舎びこちこちしうおはせましかば、いかに

玉の瑕ならまし、いで、あはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ」が証しているであろう。その右近によれば、玉鬘の田舎育ちとは思えない教養ある魅力は、乳母のすぐれた養育に恵まれたからだ、と推測されている。

さらに物語を溯つて、玉鬘一行がいよいよ都へと向う途次で詠まれた歌をとりあげよう。もとより玉鬘は、母夕顔の死後のまだ幼少の時分、大宰少式となった乳母夫婦に伴われて下向したが、やがて少式が亡くなり帰京もおぼつかなくなる。長い歳月が過ぎて玉鬘が美貌の女君に成長すると、その噂を聞きつけた大勢の求婚者が集まり彼女たちをわずらわせ、とりわけ肥後国の土豪の大夫監の強引な求婚におどされて筑紫地方の諸所に逃げまわるほかなかつた。命からがら脱出して、いよいよ上京の時がやってきた。筑紫の南端の松浦あたりの海辺で、乳母の娘兵部の君と玉鬘とが次のように詠みあった。二人の贈答歌ではあるが、同一の場でたがいに詠み交すという点で唱和の趣をも含んでいよう。

兵部 浮鳥を漕ぎ離れても行く方やいづくともりと知らずもある
かな

玉鬘 行く先も見えぬ波路に舟出して風にまかする身こそ浮きた
れ (一一〇頁)

兵部の君の歌には、土地に縁づいていた姉おもとと別れねばならぬという悲しみも言いこまれている。初句の「浮鳥」は、鳥そのものよりも、「浮」に「憂き」を掛けている点が重要である。逃亡生活のつらさからどうにか脱したというものの、この先の船泊りさえ

もわからず、将来への新たな不安がつのである。姉おもととも離れるという、孤立無援の思いを、漂泊の発想の形式によって詠んでいる趣である。これに対する玉鬘の歌も前歌の「浮（鳥）」「行く方」を踏襲して「行く先」「浮き」を用いて漂泊の歌に仕立ててはいるが、わが身の存在をそのような運命としてとらえようとしている。「風にまかす身にそ浮きたれ」の歌句の重々しさに注意されよう。「浮き」には「憂き」がひびいて、世の風波に身をまかせられないように、漂泊の人生が運命づけられたわが身だとする。これが、物語で詠まれる玉鬘の歌の初出である。

この玉鬘の初出歌の「風にまかす身にそ浮きたれ」の「身」は、順序は逆ながらも、前掲の右近への返歌「初瀬川：」の、「瀬に身さへ流れぬ」の「身」ともひびきあうのではないか。自らを憂き身だとする意識が、右近に出遭うという偶然もわが運命だということふうに照応しているように思われる。ということになれば、初出の歌をはじめとして、これまでみてきた三首にはすべて、己が身の運命を痛恨する思いが貫かれていることになる。それが、六条院にたどりつくまでの彼女の心の軌跡をあらわしているよう。そして第三首の源氏への返歌では、わが身への痛恨によって源氏の歌に対抗しえたのである。「数ならぬ身」が「うきにしもかく根をとどめけむ」という内省が、源氏の贈歌を切り返している。

三

六条院の物語に玉鬘が本格的に組みこまれるのは、「胡蝶」巻後

半からである。初夏のころ、玉鬘の存在が世間に知られるようになり、彼女のもとに多くの男たちからの恋文が寄せられるようになる。そのようになることが、源氏の当初からの願望であった。彼は、めぼしい求婚者を列挙しては、それぞれに批評を加えていく。一番目の兵部卿宮は、源氏と同じ桐壺帝の皇子たちのなかでも最も親しい弟宮であり、すぐれた趣味教養の持ち主である。ここでも、まことの風流人として高く評価されている。二番目は鬚黒大将で、誠実一徹の無骨者だとされる。彼が玉鬘に熱中するのを、源氏は、孔子ほどの聖人にも過失はあるもの、という諺を引いてからかっている。また内大臣の長男柏木は、じつは玉鬘の異母弟にあたる。源氏と玉鬘もそれを知っているだけに、おのずと求婚者としては埒外に置かれる。このように源氏が、玉鬘への懸想を媒として大勢の男たちを六条院へと惹きつけようとするのは、彼一流の、人々をその魂の次元から掌握しようとする仕方である。そのことは前記したように、源氏をはじめ玉鬘に消息を贈る際に、右近に語っているのだが、さらにはじめて対面して感懐をおぼえた後、紫の上を相手に次のように語っている。同様の趣意が繰り返されるのは、それだけ源氏の衷心から引き出される独自の着想だといつてよい。

……かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬の内好ましくしたまふ心乱りにしがな。すき者どもの、いとるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののかさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあはぬ人の気色見あつめむ。

(一三二頁)

相手の紫の上からは「あやしの人の親や。まづ人の心励まさむことを先に思すよ。けしからず」と言われ、冗談のようにしか受けとめられない。常人には理解されがたい、源氏の特異なまでの思いつきではある。

このように源氏は当初、男たちの玉鬘への求婚ぶりを傍観者の立場で観察するつもりではあったが、しかし時が経つにつれて彼自身も彼女の魅力に無関心ではいられなくなる。そうした心情から詠みかける二人の贈答歌である。

御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさまの
なつかしきに、立ちとまりたまうて、

源氏「籬まの内に根深く植ゑし竹の子のおのが世々にや生ひ
別るべき

思へば恨めしかべいことぞかし」と、御簾を引き上げて聞こえ
たまへば、あざり出でて、

玉鬘「今さらになかならむ世か若竹の生ひはじめけむ根を
ばたづねん

なかなかこそはべらめ」と聞こえたまふを、いとあはれと思しけり。さるは心の中にはさも思はずかし。(胡蝶・一八二頁)
源氏は、邸内の若々しい呉竹が風になびくのに触発されて、若い玉鬘を「竹の子」に喩えて詠んだ。邸内に根深く生えている竹とは、六条院の深窓にしっかりと据えられた玉鬘のことでもある。しかし、下の句「おのが世々に…」の意がやや曖昧なのは、「世々」が不明確だからである。もともと「世」の語は多義的で、ここは男女の仲

ぐらいをさし、「おのが世々」とは玉鬘が将来誰かに縁づくその結縁をいうのであろう。彼女がそうなれば当然ながら自分(源氏)から離れていく。源氏はあれこれ婿がねに思いをめぐらしては別離の悲しみを直感している。しかしそれは、単に養父としての感情にとどまらず、この語句の裏には彼女の婿に対する源氏の妬心のような感情さえ去来しているであろう。そのことは、歌に添えられた「思へば恨めしかべいことぞかし」からも明らかである。この「恨めし」は、男女関係をいう常套的な語である。源氏のこの歌は、贈歌として詠まれてはいるものの、一面では自らの意識の底にわだかまる孤独な思いの、独詠的なびびきをもつくり出している。それというのも、彼が、愛着の気持とそれを諦めねばならないとする気持との、入りまじった複雑な思いにかられているからである。

これに対して玉鬘はどう応ずるか。贈歌と同じ「世」「若」竹を用いて、返歌らしく照応させている。そして全体の文脈を「(今さらになかならむ世か) ↓ (根を) たづねん」と構成する。そしてここでの「世」は人生の時節ぐらゐの意、また「生ひはじめけむ根」は生えはじめたもの根、すなわち生みの親(内大臣)をさす。二首の関わりとしては、源氏のいう「竹の子が」生ひ別るべき」に対して、玉鬘は「(世)世か たづねん」と言い返して、どのような時節がごうとも実父のもとを尋ねようとは思わない、と反発する。このような返歌の切り返し、いかにも贈答歌らしいかたちになっている。さらに彼女は、源氏の添え言に照応させるべく「なかなかこそはべらめ」として、なまじ実の親を尋ねてはか

えって不都合だろうと言う。歌意を補強した言葉ともみられるが、しかし彼女の底意として、真実、実父邸への移転を断念しているのかどうか。これについて語り手の評言に「さるは心の中にはさも思はずかし」とあり、あらためて彼女の心内を語っていく。それによれば、彼女は内大臣との関係を諦めてはいないが、さしあたって「この大臣（源氏）の御心ほへのいとありがたきを、（内大臣を）親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならずや」として、当座の養い親である源氏の、めつたにはありえない心づかいに心を惹かれていくのである。

このような玉鬘の心を付度してあらためて贈答を考えてみると、そもそも彼女は、源氏の贈歌にこめられている彼の微妙な心の揺れには気づいていなかったであろう。源氏が「竹の子が」おのが世々に生ひ別るべき」と言うのに対して、彼女が「…世か）たづねん」と反発的に応じたのは、内実よりも言葉そのものに即しての切り返し方といつてよい。しかしそれは、贈答歌の作法として共感のひびきあいをつくり出していく。

物語は、これに続いて、もう一つの贈答歌へと展開していく。

源氏「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほえぬかな

世ととももの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ころを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを、いとうた

ておぼゆれど、おほどかなるさまにてものしたまふ。

玉鬘 袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ
(一八六頁)

源氏は、手もとに供された果物のなかの橘の実をもてあそびながら、往時を懐しく思わせるといふ花橘を連想して、その典型的な名歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の香ぞする」（古今・夏 読人知らず）の表現に即して玉鬘への贈歌を詠んだ。「橘のかをりし袖」とは、かつて深く情を交した亡き夕顔のことであり、下の「身」はその娘の玉鬘をさす。その二人を比べても別人とは思われない、というのが一首の趣意である。源氏にとつて目前の玉鬘は故人の分身、いわばもう一人の夕顔として認識され、かつての恋が再来したと思われている。さらにこの歌に直接して、相手への口説き文句がくどくどと述べられる。「世ととももの心にかけて忘れがたきに、…夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」と。前掲の贈答歌ではさりげなく言いこめていたのに相違して、ここではあからさまな懸想の言葉になって、積極的な恋へと進んでいく。右の地の文で玉鬘を「女」と呼んでいるのも、これがいかに恋の場面であるかを象徴している。

ここまできると、さすがに玉鬘にも源氏の懸想の言動であることが明らかにされてくる。彼女は直感的に「いとうたて」と思うが、何気なくおおように返歌で応じた。「袖の香」が亡き母夕顔をさし、また下の句の「橘のみ」の「み」は「実」「身」の掛詞、「橘の実」とは夕顔の子である自分（玉鬘）をさす。二首は「橘」「袖」「よそ

ふ」の語を共通させているが、その贈答歌の呼吸に注意してみよう。源氏が、「よそふ」から二人は別人とも思えない、と思いをかけるのに対して、玉鬘は逆に、「よそふ」からこそわが身までが母親同様にはかなく早死にをしそうだ、そうなつては大変なことと切り返す。ここでも、彼女の返歌のすぐれた技によって、贈答歌としての共感が生み出されていよう。

源氏はこうした相手の手応えにいいよ執着を強めて、添え臥すことにもなり、その翌朝、次のような歌を寄せている。

源氏「たくひなかりし御気色こそ。つらきしも忘れがたう。いかに人見たてまつりけむ

うちとけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすば
ほるらむ
(一九〇頁)

「若草」は若い玉鬘のこと。「ね」は「寝」と「根」の掛詞で、「若草」の縁語。一首は、何もかも許しあつて共寝したわけでもないのに、あなたはどつして事あり顔に思い悩んでいるのだろうか、の意。この歌は『伊勢物語』四十九段の、兄の懸想とそれに驚く妹によつて詠み交す贈答歌によつていられる。

兄 うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結はむことをしぞ思ふ
妹 初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな
兄が、若々しいので添い臥したくもなるあなたと、他の誰かが契り
を結ぶのを惜しく思う、と詠みかけると妹は、なんとめずらしい言
葉か、兄妹として隔てなく無邪気に思つてきたのに、と反発する。
この歌の「若草」「ね(根・寝)」が共通する点でも、この贈答歌か

らの引用であることが明らかである。源氏の歌は、もとの歌の兄妹の仲を父娘の關係に転じて表現したことになるが、兄妹の恋も父娘の恋も尋常ならざる事態である。これをさすがに「いと憎し」と思う玉鬘は、「承りぬ。乱り心地のあしうはべれば、聞こえさせぬ」とだけ伝えて、返歌は詠まなかつた。

このように「胡蝶」巻は、源氏と玉鬘が歌を詠み交すことを通して、源氏の恋着と自制との平衡がしだいに崩れていく事態を語りはじめたのである。彼は以後、義父なるがゆえに情交を遂げぬ恋の苦悩を深めていくことになる。

四

源氏は、玉鬘への抑えがたい恋慕の情をいだきながらも、一方では彼女の婚がねに強い関心を寄せている。前記したように、「兵部卿宮などの、この籬の内好ましようしたまふ心乱りにしがな」(玉鬘・一三一頁)の思惑から、彼を第一の候補者と考えるようになっていた。その兵部卿宮が六条院を訪ねた五月雨の宵、源氏は一計を案じた。玉鬘の身辺に螢を放ち、そのほのかな光で、彼女の姿を一瞬ながら照らし出して見せた。驚いた宮はその美しさに魅了され、いよいよ恋着の気持を強めていく。そうした宮から歌を詠かけられ、それに返歌で応ずるといふ贈答歌がこの巻には二首おさめられている。

(1)は螢火に驚かされた折、(2)は端午の節句の日のものである。
(1)宮 なく声もきこえ虫の思ひだに人の消つにはきゆるものかは
玉鬘 声はせて身のみこがす螢こそ言ふよりまさる思ひなるら

め (二〇一頁)

(2)宮 今日さへや引く人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみな
かれん

玉鬘 あらはれていとと浅くも見ゆるかなあやめもわかずなかれ
けるねの (二〇四頁)

(1)では「螢」を詠みあつてゐるが、「古今集」以後その螢の火(灯)を、恋する魂を連想させる歌言葉として用いられる例が多い。ここでも同じく、「思」ひ「火」の掛詞になつてゐる。そしてこの虫は、耳に聞こえる鳴き声はないが目に見える灯の光があるとして、その特徴をきわだたせてゐる。宮の歌は、鳴き声も聞こえないこの虫の光さえ、他人が消そうとして消えるものではなく、まして私の胸に燃える火はどうにも消えることがない、の意。あなたを恋うる私の魂の炎は螢以上だ、として胸の内を訴へた。

これに対する玉鬘の返歌は、贈歌の「声」「虫(螢)」「思ひ」に即しながら、鳴き声をたてず身を焦す螢の方が、あなたのように声に出して言うのよりもずっと深い思いなのだろう、と切り返した。ここでいう、声に出して言わない方がかえつて思いが深いとする発想は、次の例からもわかるように恋歌の常套であり類型である。

音もせで思ひに燃ゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ
(重之集)

心には下ゆく水のわかかへり言はで思ふぞ言ふにまされる
(古今六帖・第五)

彼女の返歌は、こうした類型の枠に沿つて、さりげなく反発的に応

じてゐる。これも彼女の詠歌のすぐれた技といつてよいだろう。

(2)は、五月五日の節句にちなんで、「あやめ(菖蒲)」の「根」を詠みあう贈答歌。宮の贈歌では、「あやめ」に自身を擬え、「根」「音」、「流れ」「泣かれ」の二組の掛詞を用いた。一首は、節句の今日でさえ引く人もなく水中に隠れて生えている菖蒲の根は、ただ水に流れているだけなのか——あなたに相手にされない私は人目に隠れて声を出して泣いていなければならぬのか、の意。

これに対する玉鬘の返歌は、贈歌の「水隠れに生ふる」に照応させるべく「あははれて」とし、さらに「あやめ」に分別の意をも含めた掛詞とした。これによつて、隠れて水中を流れていた菖蒲の根が水面に現れるとひどく浅く見える——分別もなく声をあげて泣くというあなたの気持がひどく浅いものだとかわかつた、と相手の言い分を切り返すことになる。これも、贈歌の言葉に即すことによつて反発しようという典型的なまでの返歌の作法だといつてよい。それというの、前掲の(1)とも同様に、宮との贈答歌が一個の男と女としての一般的な関係によつてゐるからである。その分だけ彼女も返歌するのにもくみしやすいことにもなる。ところが相手は義父として懸想する源氏ともなると、その詠歌も一筋にはいかないのである。

みてきたように兵部卿宮は、源氏の螢火の趣向で玉鬘への執着を強め、そのために彼女との贈答歌を繰り返すこととなつた。しかしこの趣向は、宮を驚かしたのみならず、それを演出する源氏自身もその恋の情趣の場にのめりこんでいく点が、特に注意されよう。他

者を驚かせようとする源氏の魂胆じたいが、抑制された恋の行為であった。物語のこのあたりの語り手は、源氏のこの思いつきを、勝手に心をときめかせていると評し、またその熱心なまでの演出ぶりを、親といったものではなく手に負えなおせっかい者だ、などとからかっている。この揶揄的な評言は、源氏の、娘ならざる娘への屈曲した恋心のありようを浮き彫りにしている。宮の好色心を惑乱してやろうとする源氏の意図は、じつは彼自身の好色心から出てものである。

「蜚」巻後半には、源氏が玉鬘を相手に語る名高い物語論がある。作者の独自の考え方を源氏の口を借りて語っているとみられるが、しかし一面では源氏の玉鬘への屈曲した思いを訴えるのにも、まことにふさわしい論議にはなっている。この論議では、事実ならざる嘘を意味する「いつはり」と、作りばなしを意味する「そらごと」が、「まこと」とどう関わるかが勘どころになっている。源氏が「そらごと」「まこと」の対応によって、作りばなしにこそかえって物語の真実がこめられるとする虚構の真実を主張する。これに応ずる玉鬘は「いつはり」「まこと」の対応によって物語を非事実・事実の次元でとらえ、その内容が世の中の実際の事実であるかどうかの問題だとする。これがじつは当時の一般的な考え方であった。したがって彼女の観点に立つかぎり、源氏の虚構論はいかにも非常識で容易には理解できない。源氏は、その真意が顧みられない孤独な存在にしかならない。これは、彼の屈曲した思いの訴えと照応しあっている。次はこうした物語論議をふまえた贈答歌である。

源氏 思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたくひ
なき

玉鬘 古き跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心
は (二一四頁)

この二人の贈答歌では「昔の跡」「古き跡」の語を共有しているが、おおむね古物語のものめずらしい内容をいうのである。それに関係づけて、源氏と玉鬘の親子仲を問答しあっている。源氏が、自分を顧みない彼女を無類の親不孝と難ずるのに対して、玉鬘は、自分に言い寄る源氏を世にもありえない父親だとして反発する。この問答がいかに言葉遊びの趣に終始しているのも、二人の物語理解が噛みあっていないからであろう。それだけに、容易には恋を成就できない者同士の間答歌だといえよう。

次巻「常夏」のはじめの一節で、玉鬘は源氏の言葉のはしほしに、実父内大臣と源氏との不仲を直感して、実の父娘の対面が容易ならざるものと思った。しかし源氏は、彼女に和琴を教えながら亡き夕顔を話題にして、「いかで、大臣にも、この花園（の撫子）見せたてまつらむ」と、いずれ二人を引き合せたいと語った。その折の贈答歌である。

源氏 撫子のとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ
玉鬘 山がつの垣ほに生ひし撫子もとの根ざしを誰かたづねん

二首はともに、亡き夕顔にふれている。源氏の脳裏にある故人への追慕がいよいよ玉鬘への恋慕をつのらせ、こうした贈答歌を引き出

していくのであろう。源氏の歌の「撫子」は玉鬘をさすが、その同じ花の異名「常夏」を重複させ、それに「懐かし」が掛けられた。「もとの垣根」は撫子がもともと生えていた垣根、すなわち母の夕顔をさす。「人」はここで話題になつてゐる実父の内大臣、その彼は懐かしく昔を思い起こさせるあなたを見たら、あの母親（夕顔）のことを尋ねるだろう、として内大臣と夕顔の仲にまで溯つてゐる。やはりあなたは実父のもとに戻るのか、の気持をも言いこめていよう。

これに対して玉鬘は、源氏のいう「垣根」を身分卑しい者の「山がつの垣ほ」ととらえなおし、そんな卑しい母のことなどを内大臣は尋ねることもない、と切り返した。言葉の上では源氏の言い分を否定したのだから、自分はこのまま六条院にとどまつてゐる、ということにもなる。しかしその底意として、実父の方からは詮索しないだろうから源氏の方から伝えて対面できるように、の願望がこめられてゐる。この返歌は、源氏の意向に従いつつも反発するといふ、二重の意を含んでゐる。源氏はそれを直感したのであろう、「苦しままで、なほ忍びはつまじく」と呻吟するほかないのである。

次卷「篝火」にも二人の贈答歌がとりこまれてゐる。初秋の夕月夜、玉鬘への執心をつのらせる源氏が彼女のもとをたずねる。庭前に篝火をたいていたが、源氏がその煙に託して彼女への断ちがたい恋情を詠み、それに玉鬘が返歌で応じた。

源氏 篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ
玉鬘 行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば

(二五七頁)

源氏の歌では「恋」に「火」を掛け、二首はともに「篝火」「煙」の二語を共有しあつてゐる。源氏は、篝火の炎とともに立ちのぼる恋の思いの煙こそ、いつもながら燃え立つわが恋の炎だった、と胸の中を訴えた。これへの玉鬘の返歌は、果てもない天空のなかで消してくれ、篝火とともにのぼつていく思いの煙というのなら、の意。源氏の訴えをさりげなく切り返した歌である。この篝火には死者の魂を迎える、いわゆる迎え火に近いイメージがあるとする藤井貞和の解釈に從いたい。源氏の胸奥には、亡き夕顔の面影がちらちいてゐる。しかし彼の一面では、母娘二代にわたつて恋してはならぬという自制も強められていよう。

前卷「常夏」の場合もそうであるように、玉鬘が六条院に入りこんで時が過ぎたところで、源氏が彼女の将来の処遇を真摯に考えざるをえなくなるのであろう。実父内大臣の存在を考慮し、ひいては亡き母親への回想があらためて強められもする。物語は新たな展開へと胎動してゐる。

五

次卷「野分」にいたると、これまでとは逆に玉鬘の方から詠みかける贈答歌が現れる。野分の翌日、源氏が子息夕霧を伴いながら六条院内の女君たちを見舞つた。玉鬘のもとでは、夕霧が、彼女に戯れかかる源氏の、親らしくない振舞いを見て驚いた。夕霧の視点から語られる場面であるが、親密に接していた源氏がやがて真顔で立

ち去ろうとするところで、玉鬘から率先して詠みかけた。

玉鬘 吹きみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべき心地こそす
れ

源氏 下露になびかましかば女郎花あらしき風にはしをれざらまし

(二八〇頁)

異例の女からの贈歌を詠んだのは、見舞ってくれた源氏への礼儀によっているからとみられる。二首に共通する語は、玉鬘をさす「女郎女」と「風」。玉鬘の贈歌は、表現上、吹き乱れた風の様子に女郎花が今にもしおれてしまいう、の意だが、内実は、あなたの無体な振舞いに私は今にも死にそうだと、として源氏を難ずる歌になっている。源氏の振舞いを「吹きみだる風」と喩えてのは、彼が風見舞いにかこつけてうるさく懸想したからであり、そのことを彼女は冗談っぽく「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」とも源氏に言っていた。贈歌ながら、女歌に特有な反発の発想を軽やかに含んでいる。

これに対して源氏は、自らの秘かな恋心を「(木の)下露」と喩えて、全体を反実仮想の構文でまとめた。表面上は、あなたがもしも木の下露になびいていたのなら、女郎花は荒々しい風にしおれることはあるまいに、の意だが、その内実は、私になびいていたのなら、あなたは困ったりはしないだろうに、というのである。贈歌の反発的な発想をさらに否定しているのだから、ここでも源氏は彼女への愛着を表現する。源氏と玉鬘それぞれの苦衷を秘めながらも、親しく共感しあう趣の贈答歌になっている。

女からの異例の贈歌が、もう一例だけ次巻「行幸」にある。玉鬘の処遇を考えるべきだとする源氏は彼女を、尚侍として冷泉帝のもとに出仕させようと考えた。そのために、彼女を六条院の他の女君たちとともに、冷泉帝の大原野への行幸を見物させた。翌日、源氏は彼女の帝の印象を確かめるべく「昨日、上(帝)は見たてまつりたまひきや。かのことは思しなびきぬらんや」と消息してきた。その時の贈答歌である

玉鬘 うちきらし朝ぐもりせしみゆきにはさやかに空の光やは見
し

源氏 あかねさす光は空にくもらぬをなごみゆきに目をきらし
けむ

(二九四頁)

異例の女からの贈歌とはいえ、源氏「昨日、上は……」への返事であるから返歌といえないこともない。ここでは、その返事をあえて和歌に仕立てたことが重要であるらしい。「み雪」「行幸」の掛詞、また「(空の)光」は帝をさす。一首は、霧で朝曇りして雪もちらついた行幸では空の光、すなわち帝の姿も拝することができない、の意。源氏のいう「(あなたが)なびきぬらん」の推測をはぐらかして、帝の姿も出仕の気持もはつきりしないとす。こうした表現が可能なのは、和歌だからである。このように贈歌に仕立てたのは、玉鬘のすぐれた知恵だともいえよう。

源氏の返歌は、前歌に照応すべく「光」「みゆき」の語を用いて、玉鬘の言い分を切り返す。光が曇りなく射していたのに、どうしてあなたは行幸の雪に目をくもらせてはつきり見なかったのか、の意。

ここには、実際には帝を拜して心動いたはずなのに、の気持も言いこめられ、彼女の出仕を強く勧めている。

物語は続いて次巻「藤袴」で、玉鬘の尚侍への出仕が語られるようになる。そして彼女がじつは内大臣の実娘であることも知られ、それに驚いた夕霧と柏木がそれぞれに彼女と贈答歌を詠み交す。まずは夕霧が、玉鬘とは実の姉弟でないことを知って、あらためて彼女への関心をいだく。二人は大宮を祖母とする従姉弟にあたり、最近亡くなった大宮の喪に服している。

夕霧 玉鬘 同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも
たづぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫やかごとならまし
し (三三三二頁)

贈歌の「藤袴」には「藤衣（喪服）」の意をひびかせ、さらに縁故の色（紫）であることをいう。一首は、あなたと同じ野の露でしおれている藤袴、同じ祖母の死を悼む私に、申し訳程度でも親情をかけてほしい、の意で、血縁につながる者同士の友誼をと訴えかけた。実の姉でないことを知ったればこそこの訴えである。

玉鬘の返歌は、贈歌の「同じ野の露」を否定的にとらえて「はるけき野辺の露」とし、歌全体を反実仮想の構文でまとめあげている。一首は、尋ねたところで、それが遠い野辺の露というのであれば、この藤袴の薄紫色は単なる申し訳でしかない、の意。実際には二人の間には何の関係もないとして、夕霧の訴えを切り返す、典型的な女の返歌である。

次は柏木との贈答歌。彼は、これまで玉鬘に懸想してきたのに彼

女が実の姉であることを知り、その気まずさから詠みかけてくる。

柏木 妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける
る

玉鬘 まどひける道をば知らで妹背山たどどしくぞ誰もふみまどひける
し (三四一頁)

贈歌には遠隔地の歌枕が二つとりこまれていて、大和の「妹背山」はここでは姉弟の仲を、陸奥の「をだへの橋」は仲が絶えることを連想させる。一首のなかに遠く隔れた二つの歌枕を用いるのは稀れであるが、そこに柏木のだまどい感情が流れているのであろう。また「ふみ」は「踏み」「文」の掛詞。一首は、自分たちが姉弟という事情も知らずに文を贈ったりして、遂げられぬ恋の道に踏みこんでしまった、の意。

これへの玉鬘の返歌は、「まどひ」「道」「妹背山」「ふみ」の多くの語を用いて贈歌に即応させている。これは、あなたが恋の道に踏み迷っていたのも気づかず、姉弟の関係なのに納得いかぬ思いのまま文を受け取っていた、というのである。返歌として贈歌を切り返す発想に立っているが、相手をきびしく糾弾する体の歌ではない。むしろ相手のとまどいを包みこむような心づかいさえ感取される。これも玉鬘のすぐれた歌の技と思われる。

物語がさらに進んで、玉鬘の出仕の時期までが世間に知られるようになると、彼女を諦めきれない多くの求婚者たちからあらためて歌が届けられる。

鬘黒 数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき

兵部卿官 朝日さす光を見ても玉笹の葉分の霜を消たずもあらなむ
左兵衛督 忘れなむと思ふももの悲しきをいかさまにしていかさ
まにせむ (三四四頁)

これらに對して玉鬘が返歌を詠んだ相手は、兵部卿官だけであつた。
その返歌、

玉鬘 心もて光に向かふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ
(三四四頁)

宮の贈歌に照応させて「光」「朝」「霜」を用いているが、ここでは「あふひ」が重要であらう。これは向日葵（ひまわり）のことで、自ら日の光に向かう向日葵でさえ朝置く霜を消すことはないとして、さらに自分のことに転じて、まして私はあなたを無視することはない、と詠んでいる。切り返しを旨とする返歌の作法からすれば異例の表現である。相手はこれまで多くの歌を詠み交してきた宮であり、また入内を決めた玉鬘自身にしてみると、彼が無縁の人として遠のいていくと思うところから、かえつてこのような懇親の情を詠みたくもなるのであらう。前掲の柏木への返歌の心づかいとも通じているように思われる。

六

次巻「真木柱」に転ずると、意外にも鬚黒大将が玉鬘をわがものにしてしまった。強引に近づいた大将が、玉鬘との既成事実をつくつてしまったというのである。彼女を尚侍にともくろんでいた源氏は、誰よりもその事実失望した。玉鬘自身もまたこの結婚は意

に染まない。源氏は玉鬘のもとを訪れ、次のような歌を詠み交した。
源氏 下りたちて汲みはみねども渡り川人のせとはた契らざりし
を

玉鬘 みつせ川渡らぬさきにいかでなほ涙のみをのあわと消えな
ん (三五四頁)

源氏の贈歌に詠みこまれている「渡り川」は三途の川のこと、当時の俗信によれば、女が死んだ場合、はじめて逢つた男に背負われ三途の川を渡るといふ。また「せ」は「瀬」「背」の掛詞。一首は、あなたとは格別に親しい仲にはならなかつたが、将来あなたが三途の川を渡る時、まさか他の男に手を取らせようと私は約束したこともないのに、の意。玉鬘を自分の男に手離してしまつたことへの絶望と、なおも断念できない愛執を訴えかけた歌である。

玉鬘の返歌の「みつせ川」は「渡り川」に同じ、「みを」は水脈のこと。これは、三途の川を渡る前に、なんとか、悲しみの涙の川の水脈の泡となつて消え失せてしまいたい、の意。源氏の言い分を切り返して、死ぬ時でさえ男の誰からも世話されたくない、というのである。落胆しきつた源氏の心をやわらかに慰めているような趣の歌である。

源氏ほどの重い落胆ではないにしても、これに気落ちした人々が少なくはなかつた。冷泉帝もその一人であり、玉鬘が尚侍に就任しながらも鬚黒との結婚から実際の宮仕えが渋滞している。その帝の不満や恨みから二人の間には二組の贈答歌が詠み交される。まずは玉鬘がはじめて尚侍として出仕した時の歌。

帝 などてかくはひあひがたき紫を心に深く思ひそめけむ
玉鬘 いかならん色とも知らぬ紫を心してこそ人は染めけれ

(三八五頁)

帝の贈歌で玉鬘を「紫」と見立てているのは、尚侍は三位で、その服色が薄紫だからである。その紫色は媒染の灰の調合で濃淡の差が生ずるといふ。ここでは「灰あひ」「逢ひ」「染め」「思ひ」初め」が二組の掛詞。一首は、こども逢いがたい紫の衣の人は私は心に深く思ひそめてしまったのだろうか、の意。紫の染色の難しさに託して、逢いがたい恨みを訴えた歌である。

これに対して玉鬘は、どんな厚志かよくもわからなかった紫の色、これは格別のおぼめしだったのだ、として帝の厚志に気づかなかつたと謝している。この歌に直接に「今よりなむ思ひたまへ知るべき」の添い言を加えたのも、帝への恐縮さから出ている。

もう一つの贈答歌は、玉鬘が出仕したものの早くに退出することになる、その束の間の対面を帝が不満に思った折のもの。

帝 九重に霞へだてば梅の花ただかばかりも匂ひこじや

玉鬘 かばかりは風にもつてよ花の枝に立ちならぶべきにはひな
くとも (三八八頁)

帝の贈歌の「九重」は、幾重にも、宮中にも、の両意。また「かばかり」は、これぐらい、香だけ、の両意。宮中のせつかくの梅の花も霞に隔てられ目に入らず、香だけだとするところから、玉鬘を自分のものとして所有しえない無念さを訴えている。

玉鬘の返歌の「かばかりは風にもつてよ」は、香りだけは風の便

りにことづけよ、の意。その香とは区別される「花の枝」は目に見える花をいうが、内実の意としては、後宮の女御方、あるいは帝とも解される。いずれにしても自分は宮中にふさわしからぬ存在だとして卑下し、帝の意向をさりげなく切り返すことになる。帝の權威に恐縮する気持をこめている。

卷末近く、二月の春雨のころ、再び源氏と玉鬘が贈答歌を詠み交す。源氏は彼女への懸想を諦めながらも、春雨を眺めるうちに堪えがたい思いになる。物思いを紛らわすべく、かつて玉鬘が起居していた部屋にひとり赴いてみた。しかし気が紛れるところから、かえって執心がつのってくるばかりである。その切ない思いから彼の贈歌が詠み起こされる。

源氏 かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかにしの

ぶや

玉鬘 ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざら
めや (三九二頁)

源氏の歌の「春雨に降る」に掛けた「古里人」は源氏のこと。その「降る」には悲しみの涙のとめどなく流れるイメージがこもる。一首は、春雨の降りつづくのどかな時分なのに、あなたは古里人の私をどのようにしのんでくれているのか、と相手の心に問う歌になっている。

玉鬘の返歌では、「長雨」「眺め」の掛詞、「しづく」「ぬれ」「うたかた(泡沫)」が縁語、それによって源氏の歌の問いに応じた。一首は、長雨の降りつづく軒の雫とともに、物思いに屈する私は、

袖を濡らしながら、片時とてあなたをしのばずにいられようか、の意。春の長雨に悲しみの心を表現しながら、源氏と共感しあう心と言ひこめている。これは切り返しだけを旨とする返歌ではない。源氏の心と深く共感しあつてきた歴史をもしのばせる趣である。この返歌に接した源氏は、「玉水（涙）のこぼるるやうに」とあり、深い魂の感動をおぼえたという。

この「真木柱」巻で、いわゆる玉鬘物語が一応終りを告げる。もつとも、「若菜上」巻では源氏の四十賀に玉鬘が若菜を献ずるといふ条で、二人が久々に贈答歌を詠み交すことになる。

玉鬘 若菜さす野辺の小松をひきつれどもとの岩根をいのる今日
かな

源氏 小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

(五七頁)

主権者玉鬘の贈歌は、「小松」を引いて長寿を祈る「子の日」にちなんで「小松」を軸に、「若菜さす野辺」「岩根」を配した点で賀宴の典型的な表現になっている。それとともに、「小松」にわが意をこめて、二児の母親となった自分が、「もとの岩根」である養父源氏の長寿を祈るばかりだとする。この家族的な立場からの発想は、往時の恋情のいささかも含まれない表現であり、左大将鬘黒の北の方としての貫禄をも備えた玉鬘の、主権者としての用意周到さに基づいた表現である。これに対する源氏の返歌には、「年をつむべき」老いの意識が引き出されていよう。「小松原」という子どもの幼い生命との対応がおのずと老齢のはかなさをきわだたさせること

にもなる。こうして玉鬘との贈答歌は、玉鬘の儀式的、あるいは家族的発想によつて、往年の恋情が封じこめられているが、しかし逆に源氏の老齢意識をさえ引き出している。

以後の光源氏の物語では、玉鬘の歌はもちろん、玉鬘の物語じたいが途切れてしまう。しかし第三部の孤立した「竹河」巻は、鬘黒死後の後日譚として、未亡人となった玉鬘とその子女たちの登場する物語になっている。玉鬘はその一族の家刀自として重々しい役割を担わされているのだが、ここでも彼女は歌を一首も詠んでいない。詠もうとすればそれにふさわしい場が数多く設けられてはいるが、物語がそれを許そうとしない趣である。

そのように歌を詠まない人物という点からいえば、これまでみてきた玉鬘の物語のなかで、実父内大臣や鬘黒大将などがどうして一首も詠まないのか。内大臣は玉鬘の裳着の腰結役までつとめて再会の感動を深めていたのに……。また鬘黒が玉鬘と結ばれるようになる過程で、幾首かを詠んでしかるべきとも思われるが……。それはおそらく、玉鬘の物語はあくまでも源氏と彼女の関係がその主軸になっているから、と一応考えておきたい。

注1 『源氏物語』の本文は、新編日本古典文学全集による。

2 拙著『源氏物語虚構論』序章「物語」の論理。

3 藤井貞和『物語の結婚』。

(すずき・ひでお 本学大学院非常勤講師)